

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号： 14503
 研究種目： 基盤研究(C) 一般
 研究期間： 2010 年度～2012 年度
 課題番号： 22531023
 研究課題名（和文）
 ・総合的な学習の学習評価に関する教師の力量形成とその研修方法に関する研究
 研究課題名（英文）
 ・Research on Teacher Development about study evaluation of Interdisciplinary Study, and on the training method
 研究代表者 佐藤 真 (SATO SHIN) 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授
 研究者番号：20324949

研究成果の概要（和文）：

第一に、一般公立学校を対象とした「総合的な学習の時間」で「育てようとする資質や能力及び態度」について学習状況評価するための「評価指標」の設定方法について明らかにした点である。

第二に、「総合的な学習の時間」における評価研修の方法として開発した、グループ・モデレーションによる評価研修システムを一般公立学校を対象として実施し、その効果を検証するとともに、グループ・モデレーション法のさらなる改善を行った点である。

研究成果の概要（英文）：

It is the point clarified about the setting method of the "evaluation index" for carrying out learning situation evaluation in the first place about "the nature, the capability, and the attitude which it is going to raise" in the "Interdisciplinary Study" for a general public school.

While carrying out the evaluation training system by group moderation developed as the method of the evaluation training in "Interdisciplinary Study" for a general public school to the second and verifying the effect to it, it is the point of having made the further improvement of the group moderation method.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：総合的な学習の時間、力量形成、評価研修

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、「総合的な学習の時間」において児童・生徒の学習評価を適切に実施できる教師の力量形成とそのため学校の校内での校内研修の方法について明らかにすることである。これについては、まず我が国の「総合的な学習の時間」が、今次改訂において、教科における「習得」「活用」という学習類型に対して、「探究」という学習類型として位置づけられ、さらに「育てようとする資質や能力及び態度」を明確にして、これを育むこととされたことにより、学習評価も児童・生徒のこの点を学習状況評価として実施するものとされた。そして、そのための評価方法としては、もちろんペーパーテストは行わないものの、これまでの教師の観察や作品の評価に、新たにポートフォリオ評価やパフォーマンス評価が付加され示されたのである。しかし、各教科では国立教育政策研究所が評価観点の他に「評価指標」としての評価規準を示して児童・生徒の学習評価やその総括としての評定までのシステムを示しているが、「総合的な学習の時間」については「評価指標」等はいっさい示されていないのである。

ところで、「評価指標」すなわち「ルーブリック (rubric)」については、Burke が「効果的実績にとっての鍵は評価基準 (standard) と評価規準 (criteria) をあらかじめ設定することである。評価規準が欠如すれば、査定はただそれだけ、すなわち単なる課題や教授活動そのものにすぎない。おそらく最も重要なことは、得点化のための評価規準は判断される内容を明らかにし、そして多くの場合、同時に受容可能な作業実績のための評価基準を明らかにするということである。このための評価規準はあなたの目標 (goal) と達成の基準 (achievement standard) を伝えるのである。ルーブリックは判断されるべき評価規準を内に含んだ得点化フォームを指している。」としている。また、Wiggins は「子どもの査定 (student assessment) においては、ルーブリックは、子どもの学習成果評価するための一セットの採点指針 (a set of scoring guideline for evaluating students' work) である。」としている。すなわち、Burke と Wiggins の示すルーブリックとは、児童・生徒のある学習活動を査定するための評価の質的な拠りどころである評価規準 (criterion) と、その進歩の状況を判定するための量的な尺度の拠りどころである評価基準 (standard) を含む評価指標を意味しているのである。他方、ルーブリックのテクニカル要件については、第 1 に評価得点間の質の変化は均等でなければならない (連続性、均

一性)。第 2 に記述説明の各文に用いられている基準となる表現は、他の記述式説明欄の説明と対比したものでなければならない (対比性、類似性)。第 3 にルーブリックでは、一貫して同一の評価基準に照準を当てていなければならない (一貫性)。第 4 に複数のルーブリックがある場合には各評価基準は他の基準と照らし合わせて恣意的でないウェイトづけがなされなければならない (ウェイトづけの適切性)。第 5 にルーブリックでは評価の対象となったものが中心となっている学習行動であるために選ばれたものでなければならない (正当性、妥当性)。第 6 にルーブリックはいつ誰が行っても一貫した評価を可能にしなければならない (信頼性) という 6 点を要件として示すものもある。これらのテクニカル要件は、教育評価の客観性や妥当性、信頼性を意味するものであり、このような意味からもルーブリックは、児童・生徒の学習を評価するための道具ではなく、教師の指導改善や児童・生徒の学習促進、さらには学習成果の証明機能として効果を発揮するものである。ルーブリックの妥当性について、Wiggins は「①パフォーマンス課題が適切で妥当なものになっているか、②パフォーマンスを評価する評価基準とその記述語は妥当か」という 2 点を指摘している。また、西岡は「具体的には基準や指標を満たしていても、パフォーマンスとしては失敗している場合がないかどうかをみることになる」としている。すなわち、児童・生徒の実生活の中から創出されたパフォーマンス課題が解決されることが、ルーブリックの規準と基準の適切さを満たす前提となるのである。したがって、ルーブリックの規準と基準が適切であると判断しパフォーマンスとしても成功していたのであれば、そのルーブリックには妥当性があるといえるのである。

一方、教育評価の信頼性とは評価用具がいつ誰によっても何度行っても評価結果が変わることがないという安定性や一貫性のことであり、評価者の主観によって評価にばらつきがでないようにすることである。これについて、Wiggins は「『より良い』『より劣る』といった比較する言語 (comparative language) を用いるのではなく、その実質的な特徴を見抜き記述することがある」としている。すなわち、ルーブリックは評価の内容や本質に関わった特徴を記述しそれらの看取りについて教師の「鑑識眼」を高めることが、ルーブリックの信頼性を獲得することになるのである。したがって、これらの指摘は、グループ・モデレーションの必要性を示唆するものである。以上のことから、「評価指標」

の設定はポートフォリオ評価はもちろん、パフォーマンス評価では特に重要であり、それとともに教師の「鑑識眼」を高めること、そのためにもグループ・モデレーションの必要性は論を俟つまでもないことといえる。現在、「総合的な学習の時間」には、教科のような国立教育政策研究所が示す「評価指標」は無い。しかし、各学校において「育てようとする資質や能力及び態度」の学習状況を評価するための「評価指標」の設定は当然必要視される。そのためにも、学習評価の力量としての教師の「鑑識眼」を高める評価の研修、とりわけグループ・モデレーション等の評価研修についての本研究は特色があり、かつ有用性の高いものといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「総合的な学習の時間」において児童・生徒の学習評価を適切に実施できる教師の力量形成とそのため学校の校内での校内研修の方法について明らかにすることである。「総合的な学習の時間」は、新学習指導要領において小学校では第5章、中学校では第4章として新たに章立てられ、「探究」を担う学習として位置づけられた。しかし、これを指導し評価する教師は、養成段階の大学等では、ほとんど学んでいない。とりわけ、今次改訂で『総合的な学習の時間・解説』書において、学習評価の方法として示されたポートフォリオ評価やパフォーマンス評価については、その評価方法はもちろん、その評価方法を理解し実施するための手立てさえ不明確なままである。

したがって、これら新たな学習評価の評価方法について教師の力量形成を図ることと、そのための研修方法を明確にすることは急務である。まずは、国内外の文献調査及び我が国での「総合的な学習の時間」先進校での評価実践をもとに、研究者と実践者との共同による新たな学習評価の評価研修会を実施し、そのデータを分析・検証する。その上で、「総合的な学習の時間」の先進校以外の一般公立学校でも可能な学習評価に関する評価研修システムを開発する。

3. 研究の方法

(1), 国内外の理論研究としての文献収集とその分析、及び先行校の評価実践についての現地調査を行う。ここでは、「評価指標」設定の理論を明確にすること、及び現実の学校教育現場における「総合的な学習の時間」の学習評価の実態を明らかにする。

(2), ポートフォリオ評価とパフォーマンス評価を中心とした新たな評価方法と教師の「鑑識眼」を高める研修の実態について、「総合的な学習の時間」先進校を中心に検討する。ここでは、グループ・モデレーシ

ョンを主とする新たな学習評価についての評価研修の有効性とその実践上の問題点を明確にする。

(3), 一般公立学校を対象とした「総合的な学習の時間」で「育てようとする資質や能力及び態度」の学習状況評価をするための「評価指標」の設定方法と評価研修としてのグループ・モデレーションの評価研修システムを開発する。

4. 研究成果

第一に、一般公立学校を対象とした「総合的な学習の時間」で「育てようとする資質や能力及び態度」について学習状況評価するための「評価指標」の設定方法について明らかにした点である。先進校での特質と一般公立学校の実態とを検討し、一般公立学校でも可能であるような教師の負担感が少なく、かつ児童・生徒の学習成果に効果的な設定方法を開発した。

第二に、「総合的な学習の時間」における評価研修の方法として開発した、グループ・モデレーションによる評価研修システムを一般公立学校を対象として実施し、その効果を検証するとともに、グループ・モデレーション法のさらなる改善を行った点である。とりわけ、「総合的な学習の時間」において「育てようとする資質や能力及び態度」の学習状況評価に活用する「評価指標」の機能が、児童・生徒の能力形成と教師の指導改善にどのように働いているのかというメカニズムについて分析し、一般公立学校において可能で簡便な評価研修システムの開発にいたった。

以上、本研究は、今次改訂において、「探究」を担うことが明確化された「総合的な学習の時間」において、児童・生徒の「資質や能力及び態度」の学習評価を教師が容易にできる「評価指標」の設定方法と、それを活かした評価研修システムを開発・改善するに至った。本研究は、新学習指導要領が移行措置期間にある現在、「総合的な学習の時間」において児童・生徒の能力形成を図るとともに、それらを支援する教師の力量を高めるための一助となるものと確信する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

(1) 浦郷淳「総合的な学習の時間における評価研修に関する研究」『せいかつか&そうごう第20号』日本生活科・総合的学習教育学会, 2013年, pp. 84-91。

(2) 佐藤真「生活科における評価」『せい

かつ&そうごう第 20 号』日本生活科・総合的学習教育学会, 2013, pp. 42-51。

(3) 佐藤真 『総合的な学習』における言語活動の充実 『学校教育 No. 1148』広島大学附属小学校内学校教育研究会, 2012 年, pp. 12-17。

(4) 浦郷淳 「かかわる活動を充実させる教師の見取りと指導に関する研究」 『個性化教育研究第 4 号』個性化教育学会, 2012 年, pp. 39-49。

(5) 佐藤真 「これからの『総合的な学習の時間』における学習指導と学習評価」 『中等教育資料 917』学出版, 2012 年, pp. 10-15。

(6) 佐藤真・椋田善之 「幼児が捉えた幼小の相違を生かしたカリキュラム開発の要点」 『紀要 17 号』日本基礎教育学会, 2012 年, pp. 12-17。

(7) 佐藤真 『総合的な学習』の評価研修に関する一考察 『学校教育研究第 27 号』日本学校教育学会, 2012 年, pp. 120-131。

(8) 佐藤真 「新学習指導要領実施 1 年の検証と今後の課題」 『教育展望 4 月号』第 58 巻第 3 号, 教育調査研究所, 2012 年, pp. 4-10。

[学会発表] (計 3 件)

(1) 浦郷淳 「I C T 機器の利活用が言語活動に与える影響について」日本個性化教育学会第 5 回大会 東北大会 2012 年 8 月。

(2) 香田健治 「『総合的な学習』における評価研修に関する研究」日本生活科・総合的学習教育学会 全国大会 第 21 回大会 2012 年 6 月。

(3) 浦郷淳 「教師の鑑識眼を高める評価研修の研究」日本生活科・総合的学習教育学会 全国大会 第 21 回大会 2012 年 6 月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 真 (Sato Shin)

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科
教授

研究者番号: 20324949

(2) 研究分担者

勝見 健史 (Katami Kenzi)

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科
准教授

研究者番号: 20411100

(3) 連携研究者

研究協力者 浦郷淳 (Urago Atushi)
佐賀県白石町立有明南小学校・教諭

研究協力者 香田 健治 (Kouda Kenzi)
岐阜県 大垣市立一之瀬小学校・
教諭

研究協力者 菅原 由香里 (Sugawara Yukari)
岩手県盛岡市立城南小学校・教諭

研究協力者 濱松 久恵 (Hamamatsu Hisae)
京都府大山崎町立第二大山崎小学校・教諭

研究協力者 椋田 善之 (Mukuda Yoshiyuki)
兵庫教育大学大学院連合学校教育学
研究科博士課程

研究協力者 前原 裕樹 (Maebara Yuki)
兵庫教育大学大学院連合学校教育学
研究科博士課程